

# 日本行動分析学会ニューズレター J - A B A ニューズ

2003年 冬号 No.30 (3月12日発行)

発行 日本行動分析学会 理事長 小野浩一

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1 上智大学文学部心理学科学習心理学研究室内

FAX: 03-3238-3658(日本行動分析学会事務局と明記) URL: <http://www.behavior.nime.ac.jp/~behavior/>

|   |               |
|---|---------------|
| 会長退任にあたって.....  | 小野浩一          |
| 倫理委員会からのお願い.....  | 倫理委員会         |
| 第1回学生会員ABA派遣事業当選者決定.....                                    | 国際委員会         |
| シリーズ現場に行く: 第10回 「ひきこもり」援助の現場から<br>ファーストステップ・ジョブグループの試み..... | 上田陽子          |
| リレー特集: 私の好きなこの論文 その11.....                                  | 杉山尚子          |
| 書評: こんな本を書いた! 訳した! 読んだ!<br>『犬のクリッカー・トレーニング』.....            | 河嶋 孝          |
| 研究会紹介: リハビリテーションのための行動分析学研究会.....                           | 岡崎大資          |
| 公開講座報告:<br>家庭や学校でできる自閉症児への応用行動分析的アプローチ.....                 | 島宗理           |
| ADHDのある子どもの支援.....  | 鶴巻正子          |
| 福祉・保育・教育における行動障害の援助.....                                    | 園山繁樹          |
| 年次大会準備委員会からのお知らせ.....                                       | 長谷川芳典         |
| ニューズレター編集委員から.....  | 望月昭・渡部匡隆・中島定彦 |
| 公開講座のお知らせ   |               |
| 会員情報  |               |
| 学会事務局移転のお知らせ  |               |

## 会長退任にあたって

小野 浩一 (駒澤大学)

日本行動分析学会の会長を仰せつかって2期6年が経ちました。この間、非力な私が何とか職責を果たすことができましたのも、会員の方々、役員の方々のたゆまぬご支援とご協力、そして日々煩雑な業務を直向に遂行してくれた事務局の人たちの献身的な仕事の賜物と深く感謝申し上げる次第です。

会長に就任した1997年のニューズレター春

号 (No.7) で、私は学会運営の大きな目標として「真の学会活性化を目指す」と述べました。学会は個々の会員の研究活動や実践活動の上に成り立つことを前提に、会員が学会を盛り立て学会が会員の活動をサポートするという双方向の働きかけを促進させたい。そのためには会員各位の研究、実践活動が円滑にかつ力強く推進できるような環境整備を行うと同時に、行動分

析学をより一層社会に浸透させてゆくことが大切であると考えました。

さて、どれだけのことができたでしょうか。確かに会員数も大幅に増加し、諸々の企画や事業を立ち上げ推進してきました。それらが本当に学会の活性化に寄与できたのか、その成果が明らかになるにはもう少し時間が必要であり、これからの変異と選択の結果を待つしかありま

せん。ただ、私自身としては、会長という貴重な体験をさせていただいた中で、行動分析学が確かで手ごたえのある学問体系であることを日本および世界の行動分析家から改めて学ばせてもらったことに大きな満足感を覚えています。日本行動分析学会の今後のさらなる発展を期待したいと存じます。

## 倫理委員会からのお願い

### 倫理委員会

倫理委員会では、これまで日本行動分析学会倫理綱領における問題点について検討して参りました。最近会員から、契約関係が法的に明文化されていない相互関係の倫理について、現倫理綱領では言及されていないこと、これらの相互関係の倫理についても問題が生じないように明文化しておくべきであることが指摘されました。

契約関係が法的に明文化されていない相互関係において生じる倫理問題とは、具体的には、福祉場面で有資格者である施設職員や実習生などが施設入所者に介入を行ってそのデータを公表したり、保健師が担当地区の検診や家庭訪問の際に収集したデータを研究として公表したり、教育場面で教員が学生や児童生徒の行動に介入

を行い、その結果を学会発表したりする場合などに起こる倫理問題のことです。このような場合に、公表されたデータのもとになった研究参加者やクライアントから、および（または）データを得る機会を提供した機関から、同意や許可や承認を得るようにしておかないと、施設入所者や市民や学生や児童生徒に対する説明と同意という観点から、倫理的問題が発生する恐れが出て参ります。

こうした場合についての倫理規定の策定に關しまして、次年度の倫理委員会において継続課題として審議して頂く予定となっておりますが、これらの問題をめぐって広く会員の皆様から倫理委員会や常任理事会あてにご意見をお寄せ頂きたい、よろしくお願ひ申し上げます。

## 第1回学生会員ABA派遣事業当選者決定

### 国際委員会

日本行動分析学会(J-ABA)誕生20周年を記念して創設された標題の新規事業に關し、本年は3件の応募がありました。規程にしたがい、常任理事会で厳正な抽選を行った結果、右の2名の会員が当選されました。おめでとう！！ご研究のますますの発展をお祈り申し上げます。なお、この事業の基金は、機関誌『行動分析学研究』の販売代金ならびに、会員・非会員からのご寄付により成り立っております。

尾関唯未（名古屋大学大学院医学研究科）ポスター発表「Evaluation with behavior analysis the maternal role attainment」、正木一喜（大阪市立大学大学院文学研究科）ポスター発表「Self-control and temporal discounting in game situations: the case in which options change in every trial」

尾関さん、正木さんには、ご帰国後にJ-ABAニューズに参加報告をお願いする予定です。

シリーズ 現場に行く

## 第10回 「ひきこもり」援助の現場から

ファーストステップ・ジョブグループの試み：実践的実験（3ヵ月）を終えて  
上田 陽子（立命館大学）

「ひきこもり」の援助については、いろいろな取り組みがあり試行錯誤されてきたが、当事者の一人としてみると現在は行き詰まり感さえする。このような現状において、1つの新しい援助設定として「ファーストステップ・ジョブグループ」の提案をした。既にこのニューズレターでもその概要を紹介したが（28号）当初設定した試行期間である3ヵ月（9～11月）が経過したのでその経過報告をさせていただく。まず「ファーストステップ・ジョブグループ」の趣旨と方向性をもう一度簡単に述べた上で、この間の実践結果を報告する。なお、本論の中で被援助者を「子ども」と呼んでいるが、被援助者の多くは成人である。しかし、ここでは親が活動の中心となった活動を展開することからこの呼称をあえて用いる。

1. はじめにー「ファーストステップ・ジョブグループ（FSJG）」とはー

今、社会にある援助は、対象となる子ども（当事者）の「できない部分」に注目し、当事者仲間集まりの中での社会適応訓練を行ったり、あるいは、「そのまま受け入れよう」との掛け声のもと受容のみで完結してしまっているのが大半のように思われる。勿論それも必要な場合があるが、子どもどうしの閉ざされた集団の中で活動をするのではなく、あくまでも開かれた社会との関係性について、現時点での「できる部分」からみて、それをより良い方向に向けどうすればいいか、個別的、具体的にまず第一歩を考えてみるのが大事であると思う。当事者（子ども）の言葉に含まれる思いを考えるにつけ、社会との関係性、とりわけ本人が社会との交換的関係について積極的にかかわる行為、その中でも「仕事」の配置が必要だと感じる。人には

与えられる（given）のではなく、自分の方から出向いて得る（get）、自分の力で得る喜びというのがある。「仕事」をするということは、この自分の行動を通して喜びを得るということになると思う。社会参加への困難に苦悶している「ひきこもり」の当事者にとって、社会参加を実現するためには、皮肉にも、まず社会参加をし、社会との交換的関係にかかわる自分の行動を通して社会との関係性に目を向け、社会参加を現実的なものとして考えられなければならない。そうして初めて成るものである。そこへ繋がる「はじめのはじめの一歩」のところに、ここでいう「仕事をする」を置くのである。

これは、「仲間の集いの中でコミュニケーション能力向上」と言いつつも一般的な就労形態へのシェイピングを行うような「スキルの訓練」とも、「就労という社会の常識・規範が圧迫し生きづらくしている、誰もがひきこもる可能性がある」という言葉が行き交う中で社会との関係性を持たないことをそのまま維持することを「受容」するのとも異なるものである。今の「ひきこもり」のままで、現状のままで、できる「仕事」、すなわち、やってもやらなくてもいい、いつでもやれる、急にやめてもいい、そのような「ムシのいい仕事」、言葉を変えれば徹底的に当事者の自己決定を尊重した状況を提供するのが、膠着した状況の中でとどまってしまっている「ひきこもり」の当事者には必要な援助だと考える。そして、そのような援助が環境に無いかこそ環境に創ってしまう、というのがこのグループである。

今のところ、このような「仕事」を提供し、突然の「仕事」拒否・中断に対処し、理解・評価できるのは親しかいない。つまり「ファース

トステップ・ジョブグループ」はこのような趣旨で作る親と子のグループで、ジョブユニットというグループをまず作り、親が自分の子どもに仕事を提供するのではなく、他者の子どもに提供するという関係の中で、最初の仕事行動を成立させていくというものである。

さらに「仕事」について繰り返し言えば、世にいう「仕事」に就くことを目的に、家庭内、仲間内での「仕事」から慣れていくということに重きを置くものではない。つまり一般的就労を必ずしも目標として設定するものではない。FSJG での結果、将来、本人が、世間一般の就労の道を進もうとも、これで良いとこのままの道を選ぼうとも、また、このグループが生活共同体のようなものに変形するのなら、そこにおいても、あるいは、誰も思いもよらない新しい道を見つけようとも、いずれも、その道は本人が模索していくもの、選択するものである、と考える。その模索への第一歩として「仕事 お金を得る」という行動の成立を置き、踏み出してくればと願うものである。

## 2. 経過

説明会：機関紙『kid』（訪問による援助活動を行う「ドーナツトーク社」発行、月刊、発行部数 150 部、定期購読）紙上、および、親の会、援助職者（ドーナツトーク社代表）による「ひきこもり」家族対象の講演会で、FSJG の参加者や関心のある人を募り、8 月初旬に大阪市男女共同参画センターにおいて説明会をもった。参加者は 8 名であった。理念面での説明と、内容例案に沿っての説明をし、その後、参加者各々の感想、意見を話し合った。感想・意見を集約すると、「趣旨は理解できる、賛同する」「このような具体的な提案を待っていた」「グループを作ったからと言って子どもがすぐ動くわけではない、だからこそこのような援助設定が必要なのだ」といったものであった。

ユニット結成：8 月下旬、説明会参加者の内の 5 名でジョブユニット結成となった。当事者（子）の年齢は 18 歳・26 歳・28 歳・29 歳・

39 歳である。期間は一応 9・10・11 月の 3 ヶ月と設定し、連絡網・会場・例会・諸経費・仕事の手続き・仕事内容・賃金など具体的な話し合いをおこなった。

3 ヶ月間の展開：例会は月 1 回（原則・最終日曜日）、大阪市男女共同参画センターにおいても。そこでは、その 1 ヶ月間に提示された「仕事」についてと各家庭での子どもの日常の様子との報告と、新たな「仕事」の提案をした上で、検討すべき点について意見交換をした。

「仕事」内容については、「人手がほしいので、あなたに頼む」という仕事の必然性を考慮した上で、自分の子どもとは関係なく思いつくまま列挙し、検討し、子どもとのマッチングをおこなった。これはユニット結成時、引続いての具体的話し合いにおいて、列挙された 14 件の中から親が自分の子どもとのマッチングをおこなったものである。外へ出る仕事以外にも、その状態のままでする他家から持ち込める仕事（いわゆる内職）も検討した。内で仕事をすることも社会参加の 1 つの形である、その仕事に関連して外へ出ていくことにも繋げられる、と捉えたわけである。また、ただ列挙するだけでなく、それぞれの子どもの見合う仕事を創り出すことも検討した。具体的には、9 月例会において、「CD（源氏物語原文全巻）をカセットテープへ変換」「フィギュア修理」「高齢者介護ボランティアの助手（車イス押し）」が、10 月例会では「洋絵本（幼・小学低向け）和訳」といった仕事が提案された。「仕事」は例会で提案される以外に依頼者が連絡網（電話）で親に伝えることもあった。連絡網での情報には、仕事依頼以外にも、それに対する返答・問い合わせや、子どもの状況から見て「今、何かあるかしら...」といったものもあり、3 ヶ月を通して電話 14 回、手紙 2 回であった。

提示された「仕事」については、それを各家庭でどのように子どもに伝え、子どもはどのように応えたのか、例会で報告し合った。「やってみようか」と迷ったり、「どのような」という問

い直しをしたり、「返事は見てからでもよければ...資料を送ってもらっていい」というような、子ども達の反応が報告された。それぞれ、まったく無反応というものではなかった。期間中仕事資料を郵送したのは4件、例会で持ち帰ったのが1件あった。

そのなかで、「できなくてもいいのなら...、見てから...」という当事者(子ども)から依頼者への電話でのやりとりから始まって、郵送による依頼・完成品納品、現金書留での賃金支払いの流れで1つ仕事成立となった。この仕事の内容は「英文和訳」で、依頼者が8(4)ページの英文を「忙しい、締切日までに間に合わない、2ページ手伝ってもらえたら助かる」といって提示したものである。対象者の語学力、興味のもっているものを考慮し、2つの英論文 *An age-irrelevant concept of development* (Baer, 1970) (8ページ)と *Music and on-hold waiting time* (North, Hargreaves, & McKendrick, 1999) (4ページ)を示し、2つのうちどちらかを頼むとした。1つだけだと「する・しない」の選択しかなく決断は早く下される。2つ提示することで「する・しない・しないとしたら両方・するとしたらどっち」と選択肢も増え迷うことができる、迷うことにより「しない」への決断が遅くなると踏んだのである。完成したのは「An age...」の方であった。この「仕事」は最初、8月下旬の会で提案されたものである。9月上旬、親から依頼者に詳しく聞かせて欲しいと電話があり、その時点で改めて依頼、同日の数時間後に上記のような子ども本人からの電話があって、その日に郵送したものである。「仕事」猶予期間を1ヵ月と想定し、納期をその10日後と設定した。「納期期限は10月20日。それまでに、10月10日までに『する・しない・できない・できた』等の返事が欲しい」と伝えた。10月9日に子ども本人から「できました」の電話が依頼者にあり、10月15日に子どもから依頼者の元に完成品が郵送されてきた。依頼者は受け取ると即、「ありがとう。今日届きまし

た。助かりました」のEメールを子ども宛てに出し、賃金は現金書留で送付した。その家族においては、その仕事の「迷」できばえ」を親子で大笑した、こんなに笑ったのは初めて、それだけでもよかったという親の感想であった。郵送・現金書留についても、親ではなくその本人宛てであったことに対して、このように声かけしてくれる人がいると嬉しそうだった、何か感じるものがあつたようだ、という報告があつた。そして、今回は郵送であつたが、そのうち、依頼者が出向く・声をかける(例えば「こんにちば」「仕事、頼むわね」あるいは、できあがれば「ありがとう」)方向にもっていくのもいいのではないか、面識はなくても、子どもが依頼者の声を知っているということは次に繋がるのではないかの感想もあつた。

また、グループそのものについては、仕事創出を検討する時点において、「賃金を支払う」「仕事を創る」ことで依頼者の負担増にならないか、申し訳なく思う、という意見があつた。それに対して、「グループ内の誰が動いてくれてもそれは喜び、嬉しいものである」、「享受する者と提供する者に片寄りが出てくるが、趣旨を考えれば必ずしも公平はあり得ない」、「元々、グループというものは不平等・不均衡なものである、それを平らにする必要はない」、「あやふやなままのところ、このグループの『らしい』ところである」といった意見に収束した。

### 3. まとめ・感想

ひきこもり家族としての経験を通して、「ひきこもり」の現状、「援助」の現状からみて提案したものであるが、同じような現状認識をもつ家族が他にもいるはずだと確信のようなものがある一方で、果たして、理解してもらえらるうか、賛同を得られるだろうかと不安でもあつた。しかし、参加者全員から共感、賛同を得、このような企画を待っていてくれたお母さんたちが本当にいたことを改めて感じ心強く思った。「親は受容・共感だけで良い、手出しをするなどと言われる。一方で、親がもっと援助を、まず

親がしなくてはとも言われる。子どもを思う親の気持ちはどのような子どもであっても違いはない、子どもが何とかやっていくためにできることはと悩む、でも、今まで具体的なことを示されたことは一度もなかった。この『kid』の記事を見て嬉しかった、このお母さんの言葉に、提案として外に向け問うてみたことは単なるひとりよがりの夢ではなかったのだと実感し素直に嬉しかった。

具体的な話し合いにおいては、「期限の設定」に関して「なぜ設定するのか」「動きだすまで待っていた方がいいのでは」の意見もあった。期限を設定するのは、やっていることが適切かどうか、また、修正するところはないか、など検討するための区切りを置くことが必要であると考えたからである。FSJG はまったく初めての試みである。どのように展開し、どのような結果になるか分からない。まずやってみようという実験である。期限を設け検討し、もっと確かなもの、整ったものへとなるように、その実験を共にすると捉えてほしい。また、メンバー個々においても脱会の選択肢を置き検討する機会としたい。このような説明を加え、共有認識としてメンバー全員確認することができた。また、「仕事内容」に関しては「思いつくまま列挙する」から「内へ持ち込める仕事も」となり、つづいて「見合ったもの、創り出す」というように変化し検討した。それらの検討作業においてのメンバーの素早い理解力・行動力には感心した。日常、じっくり焦らず、すぐの結果を期待しないという問題と対峙しているにもかかわらず、である。期間中誰も動かない、問題点も最後になってから、かつ、明確に分からない、そのような形で終わってしまうのも覚悟の上であった。それが、1ヵ月目で思っていたより子どもたちが反応し(仕事をする、しないは別として)、検討する問題点も明確に把握でき、すぐ検討できるというのは、つづけていく励みになった。

そして、なによりも、1件とはいえ「仕事」が成立した。FSJG の初仕事であり、メンバー

全員の喜びであった。今回は「動いた」「できた」「笑った」「よかった」と捉え、次に向け希望となるだけで十分でないかと思う。そして、「仕事」=「外」と囚われがちだが、「内仕事」もりっぱな社会参加であると認識できたことは大きな成果のひとつであった。また1つ新たな方向が加わったと捉えることができる。

回を追うごとにメンバー同志の理解、連帯が深まっていったが、他の家族への共感はあるても干渉はしない、これも長年の苦労を経て獲得した力からくるのだらうと思った。FSJG は、とりあえずグループを作って何かをしようというものでないし、また、1人でできないからグループでならできらうといった前提で始まったものではない。環境設定の一部としてのユニットである。だから、流動的で、あやふやな形のものである。それが特徴であり利点ではないかと思う。だからこそ従来の「親の会」「グループ」に見られる問題は起りがたいと思われた。予想し得ない問題がでて、趣旨・方向性に照らしていけば解決に向えるものと確信した。

以上のようなことから、この実験的实践は、FSJG が趣旨・方向性を共有できるメンバーでのユニット構成と個々の子どもに見合った仕事の創出とで1つの援助設定としての可能性をもつことができ、その可能性への第一歩となった、と捉えることができると思う。

この報告は、とりあえずの大雑把なものである。改めてメンバー全員と共に FSJG の first step はどのようなものであったか振り返り検討してみようと思っている。そして、それが FSJG の second step へつながっていけば嬉しく思う。《筆者からのお願い》

当グループへのご意見やご批判を、さらに関心のある方・参加してもらえらる方の紹介をいただければ、ありがたく思います。上記報告にもありますように、「仕事」内容は必ずしも近接地域からである必要はありません。各地の皆様からの「仕事」交換の提案もお待ちしています。

連絡先 yohko@kcn.ne.jp

リレー特集

## 私の好きなこの論文 その11

杉山尚子（山脇学園短期大学）

私が講師をつとめるパフォーマンス・マネジメント研究会(通称PM研)のある月の例会で、メンバーの一人である明星大学の大林裕司さんから、「(指導教授の)大石幸二先生からお願いを預かってきたのですが……」と切り出されました。何のことかと尋ねると、このリレー特集のお話です。名誉なこととお引き受けする旨お返事してしばらくすると、今度は「杉山尚子先生御机下」と筆の跡も麗しく宛名書きされた速達のご依頼状が届いたではありませんか。中はと拝読すれば、お人柄がしのばれる婉曲な話法の中にも、なかなか鋭く厳しいご注文があるようで、気軽にお引き受けしたことを非常に後悔した次第です。私のルーツも書くようにとのご指示もありましたので、私の好きな論文にからめて、それにもお応えしようと思います。(なお、このお手紙はそのとき以来、執筆の確立操作として書斎の机の前にはあってあるのですが、ついに今日まで行動を喚起するには至りませんでした。)

私は慶應義塾大学で心理学を学び、いまでは行動分析家として自覚しているわけですが、ここに至るまでにはさまざまな方向転換がありました。しかし、どの選択をした時でも、科学に対する憧れと人間(の行動)に対する興味が選択の基準にあったように思います。

1977年、方向転換の末、数理心理学を学ぼうと慶應に入学したはずの私は、はやくもその年に行動分析学に出会うことになりました。佐藤方哉先生の「心理学特論」でデンショバトの色光弁別実験の話に強い印象を受け、単純な私は「これこそ科学だ!」と叫びたい気分でした。そして自分も統制された条件下で動物を使った行動の研究をしてみたいと思うようになったの

です。

ただし、問題がひとつありました。私は人間以外の多くの動物が好きではなく、特にトリは大嫌いで、ハトに触ることを考えただけで絶望的な気分になるのです。2年生になって首尾よく心理学専攻に進めたものの、ハト嫌いがなおるはずもありません。3年に進級し、いよいよ初等実験でハトを扱うことになったとき、ハトに触れるようになるまでに、漸次的近似による3週間の行動形成が必要でした。

3年生も終わりに近づいた12月のある日、当時助手でありサバティカルで渡米を控えた渡辺茂先生から呼び出され、卒論で動物実験をするようお話を受けました。当時の先生の一言はわれわれ学部生にとっては命令同然で、私は色光弁別の実験を思い出しながら、刺激性制御の研究に興味を持っていることをお話したところ、弁別学習に及ぼす先行学習の転移の効果で卒論を書くことになり、「いよいよハトか」と高揚する気分になりましたが、そのときの私はとうてい行動分析学徒ではありませんでした。

大学院に進学し、引き続き刺激性制御に関する論文を読んでいく中で、有機体が外界をどのように認識するのかという問題に興味を持つようになりました。それぞれの生物は常時さまざまな外界の刺激にさらされているわけですが、それら無数の物理的刺激的のすべてが、その生物の行動に対して機能的な刺激となるわけではないのはもちろんです。これを実にエレガントな実験にしたのが、いまや古典というにふさわしいReynolds(1961)です。Wilkie & Masson(1976)の追試により、必ずしも複合刺激の一次元のみ注意が向けられるのではないとの反証があったものの、有機体の行動を制御する本当

の意味での弁別刺激を同定しようとする実験は魅力的でした。自分もこのように、非常にシンプルでありながらダイナミックに結果を示せるような実験を工夫したいと思ったものです。

ハト（の行動）にとって、どの刺激次元が作用刺激となりうるのかに関しては複数の要因がありますが（杉山・渡辺, 1982）、トリには視覚刺激が作用刺激になりやすいが、ネズミには聴覚刺激の方が有効だといったような種特有の「目立ちやすさ（salience）」の問題でもなく、Reynolds（1961）の後の諸研究が行った反論のように、単に複合刺激の両次元とも刺激性制御をもちうるというのではなく、同一個体において、刺激条件によって作用刺激が変わるような実験をしたいと思っておりました。その方が本当の意味で、環境が行動を制御していることを示せると思ったからです。

しかし、どのような刺激を使えばそれが可能になるのかはなかなか思いつくことができません。アイデアを探す中で、Van Houten & Rudolph（1972）に出会いました。この論文は、実験の枠組自体にはオリジナリティはないせいか、あまり注目されることのないものですが、普通の人ではちょっと考えつかないような空気の流速という刺激さえ、行動を制御できることを示したもので、どのような刺激が個体の行動を制御しているのかを明らかにする際に、アイデアの重要性を教えてくださいました。同時に、環境刺激を上手に管理することによって行動を制御できるとも読み取れ、動物を被験体とした実験的行動分析の論文でありながら、無意識のうちに応用研究への興味をかきたてられたのかもかもしれません。

最終的には、四角形の形状（面積を一定にした上で縦横の辺の長さの比を段階的に変えていく）と明るさ（これも段階的に変えていく）の複合刺激を実験刺激として使うことを思いつきました。弁別訓練の第一段階では、明るさと形状のいずれか一方を弁別の手がかりとし（たとえば  $S^+$  と  $S^-$  とでは形状は同じであるが明る

さがまったく違う。ハトは形状を手がかりにして両者を弁別する）、第2段階からは、両刺激次元の刺激値を反対方向に少しずつ変えていくと（たとえば一方の形状を少し変え、逆に明るさは少し近づけていく）、冗長な手がかりが与えられた時（明るさでも形状でも弁別することもできる）、どちらの刺激次元を使って弁別をするかがその後の般化テストによってわかるわけです。Reynolds（1961）では、色光が作用刺激になるハトと、図形が作用刺激になるハトとがいたわけですが、私の実験では、どのハトもいずれか一方の刺激次元を手がかりにするのではなく、その時々（訓練の諸段階）の弁別の難易度が作用刺激を決定することが明らかになりました。つまり、 $S^+$  と  $S^-$  の形状が非常に似ていて、明るさが非常に違うときは、明るさを手がかりにするし、その逆のときは形状を手がかりにするというわけです。ハトは、状況に応じて刺激を選んだのです！ しかも8個体すべてのハトが、作用刺激の交替を実にスムーズにやってのけ、それにも大変驚かされました。

この実験をもとに、「刺激の選び方 デンシヨバトの視覚複合刺激弁別における選択的刺激制御の変化」という修士論文を書き上げ、意気揚々と審査に臨んだわけですが、面接官であった3名の先生のいずれの方からも、「論文は非常に面白い。しかし、“刺激の選び方”というタイトルがよくない。今度、基礎心理学会で、いくつかの大学から博士論文と修士論文で面白いものを集めて発表会をすることになったから、それに推薦する。ただし、タイトルは、副題だけにするように」と申し渡されました。そこで、なぜいけないのかと食い下がると、「これではまるで、ハトが刺激を選んだみたいじゃないか。刺激を選んだのは実験者だ」とおっしゃるので、私としては、実験者が選んだのは複合刺激としての実験刺激（ $S^+$  と  $S^-$ ）なのであって、環境から刺激次元（本当の意味での弁別刺激）を選んだのはまさにハトなのだということを言いたかったわけで、駆け出しの行動分析学徒に

とって、この指導は非常に不本意でした。

さらにその後、学部時代から折につけ厳しく鍛えて(?)下さっていた実森正子先生に論文をお目にかけるべく、千葉大学を訪れました。その場で実験手順を説明し、データをお見せすることおおよそ1時間、それまでの5年間常に辛口であり続けた実森先生が満面に笑みを浮かべて、「すばらしい」とおっしゃって下さいました。そこで恐る恐る、面接ではタイトルが悪いから減点して80点だと言われたと告げると、タイトルをご覧になり、なるほどという顔をされ、「それは先生方の言われた通りだ。タイトルを変えれば95点あげる」とおっしゃり、それは私への激励であったに違いありませんが、このタイトルでなくてはいけないのになあという思いは禁じえませんでした。

Reynolds(1961)の実験に惹かれ、Van Houten & Rudolph (1972)で工夫したいで行動を制御できることを学んだ私は、いまでは当時とはだいぶ違った環境に身をおいてはおりますが、個体の行動を制御する本当の作用刺激を見つけようとする姿勢に変わりはありません。

なお、このリレー特集は今回をもっておしまいたそうです。これは理事長交替に伴い、ニューズレター担当常任理事も交替し、新しい担当理事のもとで新しい企画が生まれるためであり、拙稿のせいではないということで少し安心してあります。

#### 《文献》

Reynolds, G. S.(1961). Attention in the pigeon. *Journal of the Experimental Analysis of Behavior*, 4, 203-208.

杉山尚子・渡辺茂(1982). 展望：注意に関する諸研究—選択的刺激性制御として— 哲学, 75, 185-206.

Van Houten, R., & Rudolph, R. (1972). The development of stimulus control with and without a lighted key. *Journal of the Experimental Analysis of Behavior*, 18, 217-222..

Wilkie, D. M., & Masson, M. E. (1976). Attention in the pigeon: A reevaluation. *Journal of the Experimental Analysis of Behavior*, 26, 207-212.

#### 書評

### こんな本を書いた！訳した！読んだ！

『犬のクリッカー・トレーニング』

カレン・プライア著

(河嶋孝監訳/船江かおり訳)

二瓶社 2002年10月 880円(税別)

河嶋 孝(日本大学)

本書は *Don't Shoot the Dog!* (邦訳名『うまくやるための強化の原理』)の著者プライアが書き下ろした、犬を対象とするクリッカー・トレーニングの手引き書です。正の強化にもとづくクリッカー・トレーニングの方法がわかりやすく解説されています。訳書は小型で携帯しやすい、装幀のきれいな本になりました。訳者の船

江かおりさんは大阪外語大学卒業の翻訳家です。ご自分でも犬を飼っていて、カナダでクリッカー・トレーニングのセミナーに参加したのが翻訳のきっかけになったそうです。クリッカー・トレーニングについては、次のように言っておられます。「『座れ』はこうする、『伏せ』はこうする、といった動作ごとに異なる教え方ではなく、理論が一貫しているので実践しやすい。素人には犬が理解できるように『褒める』ことが難しいので、音でマークしてエサを与える方が簡単。お決まりの動作だけでなく、好きな芸を教えられるので楽しい。そういうことに魅力を感じました。」

## 研究会紹介

# リハビリテーションのための行動分析学研究会

岡崎大資（広島県立保健福祉大学）

リハビリテーションのための行動分析学研究会は医療・保健・福祉の分野でリハビリテーションに従事されている方々を対象に行動分析学の理論と各種技法をリハビリテーションに応用するための臨床的研究を推進する研究会です。会員への情報提供と相互交流を促し、リハビリテーション医療や保健・福祉分野の発展と国民の保健医療向上に寄与することを目的としています。

医療・保健・福祉を中心とするリハビリテーションの臨床現場には、様々な問題行動を示す患者さんや、突然生じた疾病や障害を受け入れリハビリテーションによって社会復帰を果たすために行動変容を必要とする患者さんが多く存在しています。従来このような問題行動の出現や行動変容の問題については、患者さん自身の身体機能や能力・認知的側面にその原因を還元し、患者さんに関わっているリハビリテーション従事者や施設など人的・物理的環境の関与は無視されがちでした。しかし、人間の行動に関わる問題は、患者さん自身の身体的・認知的な問題だけでなく患者さんを取り囲む環境因子を無視することはできないはずです。

行動分析学では、ある行動を起こす前の先行条件と行動を起こした直後の結果がその行動の生起頻度や変容を決定すると考えています。リハビリテーションの目標は、単に機能回復や日常生活動作の獲得という次元から生活の質、生きがいといった異質の次元に変わろうとする中で、その新しい目標を達成するためには行動分析学の考え方をリハビリテーションに導入する必要性が極めて高いと考えられます。

現在、リハビリテーションのための行動分析学研究会は研究会と研修会を 1 年に各 1 回ずつ開催しています。初年度の平成 14 年度は 6 月に

第 1 回研究会を開催いたしました。その際には特別講師として 3 名の著名な行動分析家をお招きしてご講演いただきました。広島大学河合伊六名誉教授には「高齢者ケアに対する行動分析学の歴史と展望」、関西学院大学芝野松次郎教授には「高齢者の在宅ケアに対する行動分析的アプローチ」、岡山大学長谷川芳典教授には「行動分析学を用いた高齢者の自立援助技法」の 3 つのテーマについてお話いただきました。また、第 1 回研修会では筑波大学園山繁樹助教授に「行動分析学の基礎と応用 - 問題行動の理解と援助 - 」とのテーマで行動分析学の基礎から単一事例研究の方法までご教授していただきました。それぞれの研究会・研修会への参加者は行動分析学の初学者がほとんどであり、講師の先生方からは行動分析学の基礎的な部分から応用までとても分かりやすい言葉でお話いただくことができました。

このように、日頃、苦慮している患者さんの問題行動の改善や社会復帰に向けた行動変容の促進を目指して、リハビリテーション従事者がそれぞれの臨床現場や教育現場において重要な意味を持つこととなる応用行動分析的視点を築き、行動分析学がリハビリテーションに多大な貢献することを切に願って研究会・研修会を開催しております。

また、平成 15 年度のリハビリテーションのための行動分析学研究会第 2 回研究会は、8 月 4・5 日に岡山大学で開催されます第 21 回日本行動分析学会年次大会の前日、8 月 3 日（日）に岡山大学で開催することが決定いたしました。第 21 回行動分析学会年次大会準備委員長の長谷川芳典先生のご配慮によってリハビリテーションのための行動分析学研究会第 2 回研究会は行動分析学会年次大会の協賛をいただき、8 月 3

日に開催されます行動分析学会公開行事は共同開催という形で開催させていただくことも決まっております。行動分析学会員の方々にはリハビリテーション業界にどのような問題があり、行動分析学を用いてどのような取り組みが始まるかをご理解いただける機会でもあると思っています。ご興味、ご関心をお持ちになった方は是非ご出席ください。

さらに、1年に数回ではありますが、「研究会通信」を発行しております。また、今春には研究会誌「リハビリテーションと行動分析 第1巻」を発行いたします。今後も徐々にではありますがリハビリテーション界に行動分析学を浸透させるべく研究会を発展させていくつもりです。まだ、発足して間もない小さな研究会ですが、今後研究会を継続していくためには皆様方からのご指導、ご協力をいただくことが必要で

す。行動分析学会員であります行動分析学の専門家の方々から多くのご指導いただけますことをお願いいたします。

最後に、行動分析学会ニューズレターに「リハビリテーションのための行動分析学研究会」の紹介を掲載していただきました、日本行動分析学会と広報委員の中島定彦様に心より感謝申し上げます。

《会長》

辻下守弘（広島県立保健福祉大学）

《事務局》

〒723-0053 広島県三原市学園町 1-1

広島県立保健福祉大学理学療法学科内

岡崎大資

FAX : 0848-60-1226

e-mail : okazaki@hpc.ac.jp

<http://homepage3.nifty.com/reha-behavior/>

## 公開講座報告

### 『家庭や学校のできる自閉症児への応用行動分析学的アプローチ』

（2003年2月1日）

島宗理（鳴門教育大学）

香川県高松市の社会福祉総合センターで、標題の公開講座が開かれました。この地域で活動を展開している「自閉症とその周辺の障害を持つ子と親の会 1・1（あい・あい）」と、小児科で自閉症外来を開いている屋島総合病院との共催企画です。

講師には、鳴門教育大学の橋本俊顕先生、吉備国際大学の奥田健次先生、兵庫教育大学の井上雅彦先生にお願いし、それぞれ、自閉症に関する医学的な最新情報、家庭や学校のできるコミュニケーションの指導、地域や家庭のできる余暇支援についてご講演をいただきました。

参加者は、小・中・高・養護学校教員が47人、保育園・幼稚園教員が20人、医療・療育関係が20人、医師が5人、施設・作業所の職員が

34人、福祉関係8人、保護者79人、学生5人、その他6人の、合計224人でした。事前に参加申込みを行ったのですが、✓切の前に会場の定員である190人に達してしまい、たくさんの参加希望者の方をお断りしなければなりません。この分野における高いニーズと、応用行動分析学に対する大きな関心や期待がうかがわれました。

講演では、奥田先生がこの日のために編集されたという指導ビデオ（50分もの）が提示されました。参加者の方々は、指導手順や臨床上の細かな工夫、そして対象児の学習に見入っているようでした。また、井上先生による解説はわかりやすく、QOLを高めていく具体的な支援方法に関する紹介に、首を大きくうなずきながら聞き入る参加者の姿が多く見られました。

以下、アンケートに記入された、参加者の感想を抜粋します。

久しぶりに勉強した。自分がやっていること

を確認できたり、理論づけたりできた(教員)。  
さっそく実践したい(保育士)。お金の使い方や勝ち負けの教え方がよくわかった(保護者)。  
行動分析という言葉は初めてだったが、自分の子どもに対して取り組んでいることだった(保護者)。幼児期に聞いたかった(保護者)。  
実践的な話だったので、療育者や先生方にぜひ聞いて欲しい(保護者)。難しかった(教員)。  
自分にできるかどうか自信がない(ST)。  
行動分析学じたいはとても難しいと思うが、わかりやすい実践例をだしてくれたので、応用行動分析学のなんたるかがわからなくても自閉症に有効だということはわかった(保護者)。

公開講座の実施にあたっては、親の会の方が全面的に動いて下さいました。低年齢のお子さんをお持ちの方が多かったので、大変だったと思います。この場を借りて感謝致します。

特別な支援が必要な子どもの療育には、家庭、学校、医療など、地域のネットワークをフルに活用できるシステムが重要です。今回の公開講座をきっかけに、親の会や学校、医療・福祉機関、そして大学が互いに連携していく素地ができたような気がしました。

## 『ADHDのある子どもの支援』

(2003年2月2日)

鶴巻正子(福島大学)

標記公開講座は、福島の冬には珍しいほど朝から晴れ渡った穏やかな日曜日、参加者の熱気あふれるなか開催されました。

日本行動分析学会より平成14年度公開講座補助金の交付決定通知をいただいた時から、福島ADHDの会「とーます！」代表の鶴田みどりさん、「とーます！」保護者部会・専門者部会のメンバー、大学院生などが中心となり、知恵を出し合いながら準備を進めてきました。特に保護者部会は、平成13年10月、400人規模の講演会を開催した経験を持っていましたので、心

強く準備を進めていくことができました。

この日を迎えるまでにはいくつかのハプニングがありました。中でも、予定していた会場が使用規約により予約できなかったことが最大でした。募集人員の縮小と参加予約締切日を早めた旨の告知を入れ、配付用パンフと「とーます！」ホームページを作成し直しましたので、募集期間が年末年始を含めたわずか1ヶ月となりました。しかし、教師、保育士、心理士、保健師など日頃から子ども達をサポートしている人々、ADHDに関心を寄せる保護者などたくさんの方々から問い合わせと参加申し込みをいただき、締切り前には定員に達してしまいました。

午前中は、杉山尚子先生(山脇学園短期大学助教授)より「行動随伴性ダイアグラム」のご講演をいただきました。杉山先生には、ADHDのある子ども達に見られる行動特性は行動随伴性ダイアグラムからどのように捉えられるか、具体例を通し、また時には参加者にマイクを向けユーモアを交えながらお話をいただきました。会場には笑顔と頷きが溢れていました。終了予定の時刻を過ぎても質問が絶えず、活発な意見交換が続きました。

午後は、桃井範子氏、大内文江氏、加藤義和氏より、情緒障害学級内におけるトークンエコノミーシステムの活用、地域や医療現場でのSSTの活用など、理論と実践に基づく報告がされました。その後、中田教授の司会により、講演者、報告者、そして福島県のSST推進の第一人者である山本佳子氏(心理士)も交え、学校、家庭、地域、医療が互いの連携を深めADHDのある子ども達をより強力にサポートするにはどうしたらいいかというテーマに基づき、それぞれができること、それぞれへの願いなどが率直に語られました。また、杉山先生からは、報告者の内容を補足し参加者の理解を促すために、4つの基本的な随伴性についてさらに詳しくご説明いただきました。

午前10時から午後4時過ぎまでの長時間にわたる公開講座でした。しかし参加者の熱気と関

心の高さは最後まで衰えず、講演者や報告者を囲み意見交換する姿があちこちで見られました。運営委員一同充実感を胸に公開講座の盛会を祝い、中田教授の提案で一本締めにより日程を終了しました。

返却されたアンケートを見ると、「役にたった」「わかりやすかった」「関心をもった」という意見が大多数を占め、また「ペアレントトレーニングの基礎となる考え方がわかり有意義だった」(保護者)「今日参加できなかった人のために、このような公開講座をまた開いて欲しい。みんなで勉強したい」(保育士)などの意見もいただきました。最後になりましたが、このような公開講座を開催する機会をいただきましたことに心より感謝申し上げます。

『福祉・保育・教育における行動障害の援助』  
(2003年2月23日)  
園山繁樹(筑波大学)

標記公開講座について、つくばカピオを会場に開催いたしましたので、ご報告いたします。

1. 予想以上の参加者 216名

つくば発達障害研究会を昨年7月に立ち上げたばかりで、私も野呂先生もこちらでのネットワークが少ない中で、定員200名(ニーズからしてこれだけの方にはきていただきたいという願いの数です)が満たされるのだろうか、と内心心配していました。しかし、幼稚園、保育所、学校、福祉施設、保護者等々、さまざまな立場からの参加がありました。驚いたことは、同じ職場から10名以上の参加があったところが5

箇所もあった、ということでした。行動障害に対するニーズの大きさを再認識させられました。

2. 「実践的でわかりやすかった」

参加者の感想では、野口幸弘先生(西南学院大学:福祉・教育)の講演はビデオや実践現場で直接役立つ内容で、すぐにでもやってみたい、との声が多くありました。野呂文行先生(筑波大学:保育)の講演は幼稚園での子どもさんの様子が目に浮かぶようで、しかも新しい視点から考え直してみたい、との声が寄せられました。また、実際に行動分析的なアプローチを自分たちでやっていくには、きちんとしたスーパービジョンも必要と感じた、との建設的な感想もありました。行動分析的なアプローチによる新しい視点や方法論は現場には馴染みやすいように思います。また実践に向けての支援の必要性も感じました。

3. 行動分析学の社会的貢献

今回主催者の一人として肌身で感じたことは、行動分析学に期待されていることはとても大きい(多い)ということでした。予想以上の参加者数にも現れていますが、実践現場では何とかしようという熱意を持っている人はたくさんおられるのに、それを支える知識と方法論が伝わっていないのです。障害のある人の行動障害だけでなく、痴呆高齢者の行動障害、虐待を受けた子どもたちの行動問題をはじめ、科学的根拠に基づく援助の方法論として、行動分析学に期待されることは大きい、と再認識しました。

公開講座の意義はきわめて大きいと、今回もあらためて感じました。

## 年次大会準備委員会からのお知らせ

長谷川芳典(岡山大学)

<http://www.okayama-u.ac.jp/user/le/psyho/member/hase/JABA2003/index.html>

上記大会専用サイトに、(1)オンラインによる参加・発表申込みフォーム、(2)研究発表における倫理問題の発生の予防について、(3)FAQ、を追加しました。ご参加・ご発表の郵送申込みは

3月31日締切ですが、オンラインでは、月末・年度末のネット上の障害の可能性を考慮し、4月6日(日)まで受付とさせていただきます。多くの方のお申し込みをお待ちしております。

## ニューズレター編集委員から

### 広報担当委員から

望月昭(立命館大学)

3年間、広報担当常任理事として、ニューズレターの発行の仕事をしてまいりました。といっても、実務はもっぱら渡部匡隆先生、中島定彦先生にお任せして、私は記事の集まりの「心配」だけを純粹にすることと時々投稿の斡旋をしたという程度です。無事ここまでニューズレターを配信できたこと、両先生に改めて感謝申し上げます。またホームページの管理については望月要先生が一手に引き受けてくださいました。日本行動分析学会の「顔」を作っていただきました。本当にご苦労様でした。

ニューズレターは、基本的に学会からの各種情報の提供や会員間の情報交換という機能を担うものだと思います。そこでは、それぞれ公式情動的な「固い側面」に加えて、学会誌に比べて「柔らかい側面」の2つの内容を含められる点が特徴だと思います。この間に、会員の皆様の協力を得て連載してきましたシリーズ「現場に行く」「私の好きなこの論文」でも、行動分析に関係する方々が現在どのような事象に関心を持ち実践を展開しているのか、また会員が行動分析的な実践・研究にどのような経緯で取り組むに至っているか、といった柔らかくホットな状況を多少ともお伝えできたかと思います。

ニューズレターの「柔らかさ」は、会員内でのコミュニケーションというだけでなく、対社会に向けての学会の志向や意見表明、また逆に実践・研究における参加者や消費者からの要請など、今後、学会や会員が新たに対象とすべき萌芽的作業内容を紹介する機会であるとも思います。スキナーの遺言とも言うべき social action という事を、学会という組織を権威的に利用するのではなく、柔らかいままに実行していくそのためのひとつの媒介にもできる存在であると思います。

ポジティブ・ビヘイビアサポートであれ、パフォーマンス・マネジメントであれ、学会員諸氏の活躍で、この数年、行動分析的方法是に発展してきたと思います。しかし、一方で、内外の「罰」や大きな「攻撃行動」が報道され、「教員評価」に日々おびえながら狭い集団の中でファンド取得の書類書きに忙殺されている社会と自分があります。Sidman の “I wonder what will happen if ………” といった闊達なノリと、大きな社会的課題について基本的な原則を思い返しアクションのできる、そうした柔らかい学会の有り様を望みます。ニューズレターは、そうした活動の場になればと思います。最後とばかりに自分にできなかった事を次期担当にお願いして恐縮ですが、藤先生よろしくお願いします。

最後になりますが、忙しい中で、ホットな記事を提供していただいた会員や関係者の方々に改めて御礼申し上げます。

### お礼にかえて

渡部匡隆(横浜国立大学)

望月広報委員長のもと、中島先生とともにニューズレターの編集を担当させて頂きました。2000年4月から2003年の3月までに発行された全12号(19号~30号)のうち半分(奇数号)を担当させて頂きました。改めて3年間の活動を振り返り、お礼の言葉とさせて頂きます。

それまでニューズレターの編集作業を一手に引き受けて頂いていた島宗先生からパトタッチをして最初に発行したのが19号です。意気込みはよかったです。なかなか進まず結果的に春号が初夏号になってしまいました。「これを年4回か、島宗先生は大変だったろうなあ」とあらためて感じました。また、会員の皆様からは、発行間隔が明確でないというご指摘を頂きました。それを教訓にできるだけ定期発行を心がけましたが、ちょっと遅れ気味でした(渡

部担当号) 申し訳ありませんでした。

19号からスタートし、途中(2001年春号)からロゴマークがカラーに(単色ですが)用紙が白に変更になりました。また、段組も取り入れました。読みやすさはいかがだったでしょうか。

ニューズレターの編集作業は、委員長と編集委員、それに小野会長が連絡をとりあって進めていきました。その号の編集者が原案を作成し、それを委員長に報告し、さらに常任理事会で検討して頂くなかで内容を決定していきました。基本的には、19号に記されている広報委員長の方針のもと、「強制的リレー・エッセイ:私の好きなこの論文」「シリーズ:現場に行く」を軸に編集を致しました。また、常任理事会の動きを速報としてお伝えする常任理事会ヘッドライン、また各種委員会のお知らせと案内、大会のお知らせと報告、公開講座のお知らせと報告、書評、それに時事に応じた特集などを取り上げました。

そのなかの「シリーズ:現場に行く」について少しお話をさせていただきます。私は、「スクールカウンセラーの現場から(第1回)」「少年非行の現場から(第3回)」「投資行動と行動分析(第5回)」「子育て支援の現場から(第7回)」「高齢者支援の現場から(第9回)」を担当いたしました。テーマは、その時の社会的な話題や私の関心をもとに設定させて頂きました。ある程度のテーマが決まると、その日のうちに会員名簿の【あ】の段からお一人ずつ専門領域とご所属を確認していくことを繰り返してきました。できるだけ当該のテーマを直接の業務とされている方のお声をお聞きしたいと考えていました。そして、テーマに近い専門領域の方を見つけると、即座にお電話やFAXをさせて頂くというように進めてきました。感謝していることは、急な申し出にも関わらず暖かい対応をして頂いたことです。

先のような手続きのため、依頼先の状況を考慮せずに連絡させて頂いたこともありました。関係の方々に、ここであらためてお礼を述べさせて頂きます。ありがとうございました。

会員の皆様には、3年間のニューズレターについていかがだったでしょうか。学会満足度評価(23号掲載)のJ-ABAニューズの値はどのようになるでしょうか。体裁は?内容は?いろいろ気になりながら、とりあえず「アンケート2000」を手がかりに進めてきました。

私は、できるだけ速やかに、できるだけオープンに、そして、学会員の相互交流ができるだけ発展することをキーワードに編集作業を進めてきました。少しでも学会の発展にお役に立つところがあったとすればうれしく思います。最後に、発送等の作業を手伝ってもらった横浜国立大学の学生の皆さん、ご協力を感謝しています。また、広報委員会並びに事務局の皆さんお世話になりました。日本行動分析学会のますますの発展を祈念して、広報委員会ニューズレター編集委員を辞させていただきます。会員の皆様、ありがとうございました。

## 編集後記

中島定彦(関西学院大学)

望月昭先生から、ニューズレターの編集を渡部匡隆先生とともに行うようにとの「指令」を受けてから3年間、12回分のニューズレターをお送りしてまいりました。うち、私の担当分は各年度の夏冬、合計6回でした。ニューズレターの編集のようすは渡部先生が詳しく書かれていますとおりです。私の場合、発行前に「原稿がない!」と大騒ぎして、各方面にずいぶん無理を言って助けて頂きました(最終的に原稿が集まりすぎて、20ページの大部となり、送料が予算オーバーになったこともありましたが)。

夜なべして、一人で封筒の宛名シール貼りをしていると、一昔前に慶應大学の院生として学会事務局の仕事させて頂いていた頃を思い出しました。そのときにくらべ現在の会員数が倍増していることは、喜ばしいことです(でも、2倍のシールを貼らなくちゃならない)。今号で担当から外れ、ほっとしている反面、寂しい思いです.....皆様からのご支援に感謝して編集了。

## 公開講座のお知らせ

### 行動問題の理解と予防：参加者の問題解決に向けた分析と援助計画の立案を学ぶ

日時：2003年3月21日(金・祝)9:30~16:30

会場：西南女学院大学 206 教室（北九州市小倉  
北区井堀 1-3-5）

講演：藤原義博（上越教育大学）

北九州市の通園施設、養護教育センター、福祉施設とのコラボレーションによる、乳幼児期・学齢期・成人期のモデル事例でのデモン  
ストレーション

分科会：参加者の問題解決のための演習

申込先：平澤研究室（FAX: 093-583-5035：参加  
希望演習（乳幼児・学齢・成人）を記入のこと  
<http://www007.upp.so-net.ne.jp/u-noriko/kouza03.htm>

### 自閉症児(発達障害児)のコミュニケーションと学習 2：行動分析学を家庭や学校で応用するために

日本自閉症協会千葉県支部東葛地区分会および  
自閉症サポートセンター発達相談室と共催

日時：3月22日(土) 13:30~16:30(開場 13:10)

会場：さわやかちば県民プラザ大研修室（千葉  
県柏市柏の葉 4-3-1：Tel 0471-40-8600）

講師：土屋立（筑波大学心身障害学系）

久保田英美（のこのこ療育教室主宰）

定員：180名（保育：先着10名）

参加費：1000円(資料代込)

申込先：土屋立（筑波大学心身障害学系）

E-mail：rtsuchi@human.tsukuba.ac.jp

Fax：0298-53-4714

### 学会事務局移転のお知らせ

中野良顯上智大学教授の次期学会理事長選出に伴い、学会事務局が下記のように移転しました。

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1 上智大学文学部心理学科学習心理学研究室内  
日本行動分析学会事務局（FAX：03-3238-3658）